

青年期女性の親との心理的距離と
Self-Esteemの質について (2)
— 自己規定要因との相関関係からの検討 —

三 田 英 二

About the psychological distance with the women's parents
and the quality of Self-Esteem (2)

MITA Eiji

I. 問題

前研究（三田、2016）において、Self-Esteem（以下、SE）の質を性格特性（YG性格検査を使用）との相関関係から検討したが、「高依存・高服従」群と「低依存・低服従」群に大きな違いが見られなかった。

本研究では、青年期後期段階の「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の4群のSE得点と自己規定要因との相関から、この4群のSEの質について検討することを目的としている。特に、前述のように前研究（三田、2016）で大きな違いが見られなかった「高依存・高服従」群と「低依存・低服従」群のSEの質について注目し、検討していく。

自己規定要因とは、三田（1984、1986）が、SEを「重視される自己の側面に対する自己評価」と定義し、一次的には自己認知的側面（重視される自己の側面）の問題と考へ、自己評価的側面は二次的な問題と考へた。そして、この「重視される自己の側面」を中心に検討を行ってきた（三田、1994、1996、1998、1999）。その後、この「重視される自己の側面」を「自己規定要因」とし（三田、2008b）、さらに検討を重ねた。

本研究は、SEの質について検討することを目的としている。本研究で使用するSE得点は、SEの量的側面を測定している。質的側面を検討するためには、自己認知的側面との相関関係から検討していく必要がある。もともと、SEは、単なる自己評価ではなく、Jacobson, E. (1964/1981) が「自己価値 (Self-Esteem) は自己評価 (Self-Evaluation) の観念的表現、とりわけ情緒的表現である。」（訳書：p. 124）との指摘がある。

本研究では、青年期後期段階での「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の4群間にSE得点の差異が見られなかったことから、自己規定要因を用い、4群それぞれのSEの質について検討するものである。

II. 方法

1. 調査対象者

本研究は、継続的に行っているものである。分析調査対象者は、この一連の分析を始めた当初（三田、2003）のものである。このため、調査対象者は前研究（三田、2016）と全く同一であるが、参考までに、青年期後期群の調査対象者について記しておく。

青年期後期群の女性（以下、青年期後期群）90名（平均年齢19.18歳、SD=.76、range18-21）を調査対象者とした。

2. 調査用具

（1）親との心理的な距離の測定およびグループ分け

前述のように、継続的に検討を行っているためグループ分けもこれまでのもの（三田、2008a）と同一であるが、前研究（三田、2016）と全く同じ文章になってしまうが、参考までに記載する。

加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を三田（2003）が因子分析した結果を用いる。第1因子「自己決断力」（項目4、5、6、7、8、9、10、35、36）、第2因子「親への依存」（項目20、21、22、23、24、25、27、33）、第3因子「時間的展望の拡散」（項

目3、13、14)、第4因子「反抗期心理」(項目28、30、31、37)、第5因子「自信の欠如による親への服従(以下「親への服従」と略記)」(項目17、18、26、29、34)の5因子が抽出されている(付録1参照)。

各項目ごと「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの5件法により回答を求め、「全く自分にあてはまる」を5点とし、順次「全く自分にあてはまらない」まで4、3、2、1点として処理を行った。

なお、親に関係する項目への回答にあたっては、特に「父親に対して」あるいは「母親に対して」ということは教示せず、回答者の判断に任せた。青年期後期群での調査において、調査対象者からはこの点に関する質問は全くなかった。

親との心理的な距離を測定する項目として、このうち、第2因子「親への依存」因子と第5因子「親への服従」因子の項目を用いる。「親への依存」得点の理論上のrangeは8点から40点となる。「親への服従」得点の理論上のrangeは5点から25点となる。中央値は「親への依存」因子で、青年期後期群24点、「親への服従」因子で、青年期後期群12点となった。

因子得点の中央値をもとに、「高依存」群・「低依存」群、「高服従」群・「低服従」群に分け、分析用にさらにそれをクロスさせ、「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の4群に分けた。その内訳をTable 1に示す。

Table 1 各群の人数

青年期後期群	n
高依存・高服従群	22
高依存・低服従群	19
低依存・高服従群	18
低依存・低服従群	30

各群の合計人数が89名となっているのは、欠損値があるデータが自動的に除外されているためである。

(2) Self-Esteemの測定

以下の文章についても、前研究(三田、2016)と同一の文章となるが、参考までに記載しておく。

SEを測定する用具として、Rosenberg self-esteem尺度^{註1}(以下、RSEと略記)を使用した。

今回の分析データは、前述の通り継続的に使用しているデータである。RSEについても三田(2007)で使用したものと同一である。以下は、三田(2007)の記載と重複するが、参考までに記載しておくことにする。

内的整合性係数は、RSE全体では、.810と良好な値を示した。このため、RSEは単一構造として考え使用した方が良いのかもしれない。しかし、今回調査では、より詳細に検討したいと考えているため、因子分析した結果を用いる。複数の下位因子に分かれるため内的整合性係数は低下すると考えられる。内的整合性係数の低下が危惧されるが、上述の目的

のため、RSEを因子分析した結果、最も多く下位因子を抽出している三田（2000；付録2参照）の結果を今回用いることにする。第1因子「自己矮小感」（項目2、5、6、8、9）、第2因子「自負心」（項目3、4、7）、第3因子「自己肯定感」（項目1、10）となっている。今回データから内的整合性係数を算出したところ、第1因子「自己矮小感」は.756、第2因子「自負心」.618、第3因子「自己肯定感」.498であった。第1因子はある程度の内的整合性係数の値は確保できたが、予想通り、特に項目数が少ない第3因子は低い値となった。このため、分析に当たっては、RSE全体の得点も用いて行いたいと思う。

評点は、独立意識尺度との整合性をとるため、「ほとんど思わない」から「非常にしばしば思う」までの5件法により回答を求めた。理論上の得点範囲は、RSE全体では、10点から50点となる。因子ごとでは、第1因子「自己矮小感」5点から25点、第2因子「自負心」3点から15点、第3因子「自己肯定感」2点から10点となる。高得点の方が高SEとなる。第1因子「自己矮小感」は、高得点は矮小感が弱いことを示し、低得点が矮小感が強いことを示すことになる。

（3）自己規定要因の測定

三田（2008b）が行ったSEI-Bの因子分析結果を用いる。SEI-Bについては、付録3の脚注を参照されたい。

このSEI-Bの質問項目の内容が、調査対象者個人にとり重要な内容か否かを問い、「重要である」と回答された場合1点とし、「重要ではない」と回答された場合0点として処理した。「重要である」と回答した項目を自己規定する項目とした。

因子分析（三田、2008b）の結果、第1因子「他者評価」、第2因子「否定的社会的自己意識」、第3因子「自己価値への不安」、第4因子「自己能力への不安」、第5因子「コミュニケーション」の5因子が抽出されている。このうち、1、2、5因子は、外面的な自己認知を示す因子で、3、4因子は、内面的な自己任氏を示す因子である。

各因子の内容の詳細は、三田（2008b）を参照されたい。

III. 結果

各群ごと、RSE合計得点と3つの下位因子、SEI-Bの5つの下位因子得点との間で、相関分析（Spearmanの順位相関）を行った。その結果を、Table 2～5に示す。

Table 2 青年期後期群「高依存・高服従」群（N=22）

	RSE合計	自己矮小感	自負心	自己肯定感
他者評価	-.183	-.011	-.213	-.020
否定的社会的自己意識	-.529*	-.531*	-.286	-.394+
自己価値への不安	-.406+	-.514*	-.351	-.027
自己能力への不安	-.238	-.149	-.004	-.372+
コミュニケーション	-.252	-.148	-.303	-.184

+...p<.10 *...p<.05 **...p<.01 ***...p<.005 ****...p<.001

「高依存・高服従」群では、RSE合計得点とSEI-B下位因子「否定的社会的自己意識」因子が5%水準での有意な負の相関を示した。また、RSE合計得点と「自己価値への不安」因子との間に負の有意傾向が見られた。これは、自己の外面的側面を示す「否定的社会的自己意識」因子や自己の内面的側面を示す「自己価値への不安」因子の領域での自己規定が全般的なSEと関連していることを示している。すなわち、これら領域での自己規定が全般的なSEの維持と関連していることを示している。

RSEの下位因子ごとを見ると、「自己矮小感」因子では、RSE合計得点同様、「否定的社会的自己意識」因子と「自己価値への不安」因子との関連が見られ、「自負心」因子では、自己規定要因との関連は見られない。「自己肯定感」因子では、「否定的社会的自己意識」因子と「自己能力への不安」因子と負の有意傾向が見られた。

Table 3 青年期後期群「高依存・低服従」群 (N=19)

	RSE合計	自己矮小感	自負心	自己肯定感
他者評価	.075	-.138	.038	.083
否定的社会的自己意識	-.330	-.378	.064	-.410+
自己価値への不安	-.211	-.429+	.005	.012
自己能力への不安	.141	.129	-.007	.011
コミュニケーション	-.145	-.067	-.131	-.119

+...p<.10 *...p<.05 **...p<.01 ***...p<.005 ****...p<.001

「高依存・低服従」群では、RSE合計得点と本研究で測定される自己規定要因との関連が見られなかった。RSE下位因子でも、「自己矮小感」因子でSEI-B下位因子「自己価値への不安」因子と負の有意傾向が、RSE下位因子「自己肯定感」因子とSEI-B下位因子「否定的社会的自己意識」因子と負の有意傾向が見られたただけであった。

Table 4 青年期後期群・「低依存・高服従」群 (N=18)

	RSE合計	自己矮小感	自負心	自己肯定感
他者評価	-.147	-.326	.230	-.058
否定的社会的自己意識	.370	.434+	-.069	.252
自己価値への不安	-.323	-.235	-.290	-.432+
自己能力への不安	-.010	.118	.243	-.312
コミュニケーション	.193	.009	.419+	.015

+...p<.10 *...p<.05 **...p<.01 ***...p<.005 ****...p<.001

「低依存・高服従」群では、「高依存・低服従」群同様、本研究で測定される自己規定要因と全般的なSE (RSE合計得点) との関連が見られなかった。RSE下位因子においても、RSE下位因子「自己矮小感」因子とSEI-B下位因子「否定的社会的自己意識」因子の間に正の有意傾向が見られ、「自負心」因子と「コミュニケーション」因子との間で正の有意傾向、「自己肯定感」因子と「自己価値への不安」因子との間で負の有意傾向が見られた。

SEI-B下位因子「否定的社会的自己意識」因子とRSE各得点との間では、他の群では、負

の相関関係を示しているが、「低依存・高服従」群だけが正の相関関係を示した。同様に「コミュニケーション」因子も他の群では、「低依存・低服従」群以外では、有意な相関関係は見られないものの、「低依存・高服従」群だけが正の相関関係を示した。この群の特徴を示すものと考えられる。

Table 5 青年期後期群・「低依存・低服従」群 (n=31)

	RSE合計	自己矮小感	自負心	自己肯定感
他者評価	-.305	-.334	-.105	-.306
否定的社会的自己意識	-.379*	-.253	-.254	-.499***
自己価値への不安	-.532***	-.490***	-.369*	-.478**
自己能力への不安	-.249	-.325+	.002	-.179
コミュニケーション	-.539***	-.524***	-.260	-.547****

+...p<.10 *...p<.05 **...p<.01 ***...p<.005 ****...p<.001

「低依存・低服従」群では、RSE合計得点とSEI-B下位因子「否定的社会的自己意識」因子、「自己価値への不安」因子、「コミュニケーション」因子と有意な負の相関を示した。特に、「自己価値への不安」因子と「コミュニケーション」因子では、0.5%水準の強い相関関係を示している。

これらのことは、外面的な自己の側面を示す「否定的社会的自己意識」因子と「コミュニケーション」因子、内面的な自己の側面を示す「自己価値への不安」因子での自己規定が、全般的なSEの維持と関連していることを示している。

RSE下位因子では、「自己矮小感」とSEI-B下位因子「自己価値への不安」、「コミュニケーション」で0.5%水準の有意な負の相関が、「自己能力への不安」と負の有意傾向が見られた。RSE下位因子「自負心」では、SEI-B下位因子「自己価値への不安」と5%水準の負の相関を示し、RSE下位因子「自己肯定感」は、「否定的社会的自己意識」、「コミュニケーション」で0.5%水準、「自己価値への不安」で1%水準で負の相関を示した。

IV. 考察

本研究は、前研究（三田、2016）で、親との心理的な距離の違いにより、群分けした4つの群のSEの質について性格特性との相関関係から検討した結果、「高依存・高服従」群と「低依存・低服従」群のSEの質に大きな違いが見られなかったことを受け実施しているものである。

前研究（三田、2016）では、「低依存・低服従」群と他の3群を比較するかたちで検討したが、本研究では、各群ごと検討し、最終的に4つの群の比較から総括的な討論を行いたいと考えている。

1. 「高依存・高服従」群

内的整合性係数が高いRSE合計点と関係した自己規定要因は、「否定的社会的自己意識」因子（5%水準）と「自己価値への不安」因子（10%水準）の2因子であり、ともに負の

相関関係であった (Table 2)。

RSE下位因子では、「自己矮小感」因子でRSE合計得点と同様の相関関係を示し、「自己肯定感」因子では、SEI-B下位因子「否定的社会的自己意識」因子と「自己能力への不安」因子と10%水準の負の相関関係を示した。しかし、RSE下位因子「自負心」因子では、自己規定要因と有意な相関関係は見られなかった。

RSE合計得点、下位因子とも内面的自己認知を示す自己規定要因（「自己価値への不安」因子、「自己能力への不安」因子）と外面的自己認知を示す自己規定要因（「否定的社会的自己意識」因子）との相関関係が見られた。

この群は、内面的な自己の側面とのSEの関連も見られるが、主には、外面的で否定的な自己の側面で自己規定することとSEが関係すると推測される。

2. 「高依存・低服従」群

RSE合計点と関係する自己規定要因はなく、RSE下位因子「自己矮小感」因子が「自己価値への不安」因子と負の有意傾向が、RSE下位因子「自己肯定感」因子が「否定的社会的自己意識」因子と同じく負の有意傾向が見られただけであった (Table 3)。

この群は、幼少期の万能感を青年期後期段階でも維持している状態ではないかと考えている。このため、自己規定要因との関連はあまりなく、漠然とSEを支えていると推測される。

3. 「低依存・高服従」群

「高依存・低服従」群同様、自己規定要因と全般的なSEとの関連が見られなかった。RSE下位因子においても、RSE下位因子「自己矮小感」因子が「否定的社会的自己意識」因子と正の有意傾向、「自負心」因子が「コミュニケーション」因子と正の有意傾向、「自己肯定感」因子が「自己価値への不安」因子と負の有意傾向が見られた (Table 4)。

前述したように、10%水準での弱い相関ではあるが、他の群では見られないRSE下位因子とSEI-B下位因子との正の相関関係である。

この群は、親との親和性を重視する群であると考えている。自己規定要因が全般的なSE (RSE合計点) との関連は見られないが、他の群では、あまり見られない (推計学的には有意な関係ではないとしても) 正の相関関係が見られている。「否定的社会的自己意識」因子と「コミュニケーション」因子は、対人場面や社会的場面での自己の否定的な言動を気にする、といった内容である。このような言動を重視する、自己規定していることとSEが関連している。この群の特徴と考えられる。明確に自己規定しSEを支えているというよりは、他者との良好な関係を維持することと自尊心が関連していると考えられる。

4. 「低依存・低服従」群

RSE合計点と自己規定要因との有意な相関が多いのがこの群の特徴となっている (Table 5)。詳細に見ると、自己規定要因でも外面的自己認知を示す因子（「否定的社会的自己意識」因子、「コミュニケーション」因子）、内面的自己認知を示す因子（「自己価値への不安」因子）の双方との相関関係がある。

RSE下位因子「自己矮小感」因子でも、内面的自己認知を示すSEI-B下位因子「自己価値

への不安」因子と有意な負の相関関係があり、外面的自己認知を示す「コミュニケーション」因子とも負の相関関係がある。特に、RSE下位因子「自己肯定感」因子では、RSE合計点と同一の相関関係が見られている。

この群は、自己の内面・外面について明確な自己規定をすることとSEが関連していると推測できる。

5. 総括的討論

本研究は、青年期後期群において、親との心理的な距離が異なってもSE得点に差異がなかった(2008a)ため、各群のSEの質について、自己規定要因との相関関係から、さらに検討しているものである。性格特性との相関関係から検討した前研究(三田、2016)では、明確にはならなかった各群のSEの質であったが、自己規定要因から検討した本研究の結果から、各群のSEの質の違いがある程度明確になったと考えている。

「低依存・低服従」群は、他の群と比較したとき、より強い相関を示している。より明確な自己規定に基づいた自尊心を持っていると考えられる。

内的整合性係数が高いRSE合計得点と各群のSEI-B下位因子との相関を見るとき、「高依存・低服従」群と「低依存・高服従」群は、有意な相関関係は見られない。それぞれの特徴は上述の通りである。「高依存・高服従」群は、「低依存・低服従」群ほど強くはないが、自己の内面・外面に支えられたSEとも考えられ、「低依存・低服従」群のSEの質と類似したSEとも推測できるが、「低依存・低服従」群は、SEI-B下位因子「自己価値への不安」因子とRSE合計得点だけでなく、RSEの3つの下位因子と全て有意な相関関係が見られる。「低依存・低服従」群は、内面的な自己の側面とSEが強く結ばれていると推測できる。特に、他の群では見られなかったRSE下位因子「自負心」因子との有意な相関関係があり、この点において、「高依存・高服従」群とのSEの質の違いが見て取れると考えている。

<引用・参考文献>

- ・遠藤辰雄(編)1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- ・Janis, I. L., and Field, P. B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In Hovland, C. L. and Janis, I. L., (Eds.) Personality and Persuasibility. New Haven: Yale Univ. Press. pp. 55-68
- ・Jacobson, E. 1964 The self and object world. 伊藤洸(訳)1981 自己と対象世界: アイデンティティの起源とその展開 岩崎学術出版
- ・加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究 28、 336-340.
- ・三田英二 1984 Self-Esteemに関する研究(1) -青年期の発達的变化について- 関西学院大学文学部教育学科研究年報、10、29-38.
- ・三田英二 1986 Self-Esteemに関する研究(2) -青年期の性差について- 臨床教育心理学研究、12、15-21.
- 三田英二 1994 重視される自己の諸側面と性格特性に関する一研究-女子青年を被験

者として— 関西学院大学文学部教育学科研究年報、20、1-6.

- ・三田英二 1996 重視される自己の諸側面と性格特性に関する一研究（Ⅱ）—女子青年の肯定的自己認知についての検討— 臨床教育心理学研究、22、9-12.
- ・三田英二 1998 女子青年の重視される自己の諸側面に関する研究（Ⅰ）—しつけの型からの検討— 静岡県立大学短期大学部研究紀要、11-2、89-100.
- ・三田英二 1999 重視される自己の諸側面と性格特性に関する一研究（Ⅲ）—女子青年の否定的自己認知についての検討— 静岡県立大学短期大学部研究紀要、12-2、85-91.
- ・三田英二 2000 Self-Esteemと社会態度に関する因子分析的研究 静岡県立大学短期大学部研究紀要 13-2、247-266.
- ・三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達 青年心理学研究、15、1-15.
- ・三田英二 2007 Self-Esteemからみた女性の独立意識—発達の観点から、青年期後期と成人期前期の比較— 静岡県立大学短期大学部研究紀要 20-W-4、1-11.
- ・三田英二 2008a 発達の観点からみた女性の親との心理的距離とSelf-Esteemの関係 静岡県立大学短期大学部研究紀要 21、37-48.
- ・三田英二 2008b 自己規定要因からみた女性の独立意識—発達の観点から、青年期後期と成人期前期の比較— 静岡県立大学短期大学部研究紀要 21-W-6、1-16.
- ・三田英二 2016 青年期女性の親との心理的距離とSelf-Esteemの質について（Ⅰ）—性格特性との相関関係からの検討— 静岡県立大学短期大学部研究紀要 28-W-1、1-14.

付録1 独立意識尺度の因子分析結果（回転後）

（三田、2003を一部改変）

	I	II	III	IV	V	共通性
6. 人の意見もよく聞かすが、最終的には自分で決断できる。	.740	-.014	-.031	.036	-.056	.553
8. まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	.712	.046	.016	.294	-.109	.608
5. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	.699	.008	-.257	-.077	.038	.562
36. どうしたらよいのか、自分で決心できないことが多い。	-.661	.139	.276	.278	.275	.686
4. 自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	.625	-.125	.026	-.135	-.059	.429
35. 他人の意見や流行に、つい引き込まれてしまう。	-.585	.049	.043	.203	.237	.443
7. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	.583	.227	-.345	.115	.108	.535
10. 自分の意見を言えずに、相手に従ってしまうことが多い。	-.570	.190	.222	-.111	.262	.491
9. 小さなことでも、自分で決断することができない。	-.519	.026	.186	.120	.216	.366
22. つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。	-.035	.831	.051	.002	.059	.698
20. 親といっただけで何となく安心できる。	-.060	.795	.148	-.067	.021	.662
24. 親は自分の心の支えである。	.014	.786	.014	.030	.018	.620

23. できることなら、いつも両親と一緒にいたい。	-.014	.783	.026	-.056	.057	.620
21. 困った時は親に頼りたくなる。	-.141	.714	.149	.010	-.025	.553
25. 何かする時は、親にまねてもらいたい。	-.049	.653	-.078	.260	.312	.600
33. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気がない。	-.143	.645	.048	.259	.160	.531
27. 親に何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.073	.543	-.086	.256	.382	.519
14. 将来、どんな職業をついたらよいかわからない。	.015	.062	.857	.028	.126	.755
13. 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	-.194	-.005	.758	.150	-.010	.635
3. 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	.324	-.121	.687	-.023	-.159	.618
31. 両親につい反抗し、あとで後悔することが多い。	-.067	.177	.064	.698	-.180	.560
30. 親や先生のいうことには、たとえ正しくても反対したくなる。	-.010	-.030	.063	.691	-.098	.492
28. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	.113	-.325	.110	.575	-.031	.461
37. いつでも相手になってくれる友達が多い。	-.290	.113	-.047	.531	.066	.385
18. 親にさからえないで、言うとおりになってしまうやすい。	-.124	.025	.141	-.033	.748	.597
29. 親の言うことには素直に従っている。	.007	.295	.029	-.329	.637	.602
26. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている。	-.065	.469	.035	.153	.543	.544
34. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持ってない。	-.267	-.300	.031	.213	.526	.484
17. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひねめを感じることはない。	.279	.003	-.110	.037	-.517	.359
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	.495	-.014	-.472	-.159	-.112	.506
2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができると思う。	.291	-.023	-.363	-.248	.079	.285
11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	.466	.119	-.423	.026	.015	.412
12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	-.488	.070	.171	.413	.145	.464
15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする(かまんしたり、調節したりする)ことができる。	.134	.029	-.155	-.493	-.246	.346
16. 自分の考えや行動を抑えられたり、統制されたりすることには強い反発を感じる。	.151	-.097	-.229	.418	-.034	.261
19. 外から与えられた枠の中で生活する方が安心できる。	-.148	.133	.481	-.049	.334	.385
32. 大人に対してひねめを感じることも多い。	-.081	.116	.259	.446	.304	.378
二乗和	7.48	4.83	2.85	2.02	1.83	
寄与率(%)	20.2	13.0	7.7	5.5	4.9	
α	.850	.876	.809	.619	.680	

付録2 RSE の因子分析結果 (回転後)

(三田、2000を一部改変)

	I	II	III	共通性
2 私は時々、自分がてんでだめだと思う。	.724	-.152	-.014	.547
5 私にはあまり得意に思うことはない。	.444	-.358	-.324	.430
6 私は時々たしかに自分が役立たずだと感じる。	.708	-.133	.022	.519
8 もう少し自分を尊敬できたならばと思う	.595	.287	-.256	.501
9 どんな時でも例外なく、自分を失敗者だと思いがちだ。	.583	-.312	-.198	.476
3 私は、自分にはいくつか見どころがあると思っている。	-.169	.597	.382	.531
4 私はたいいていの人がやれる程度には物事ができる。	-.113	.748	.006	.572
7 私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人だと思う。	-.089	.819	.075	.685
1 私はすべての点で自分に満足している。	-.125	-.003	.745	.570
10 私は自分自身に対して前向きな態度をとっている。	-.044	.195	.738	.585
二乗和	3.03	1.34	1.04	
寄与率(%)	30.23	13.42	10.42	
α ^{注2}	.658	.667	.430	

注1：RSEについては、アイデンティティの心理学（遠藤辰雄（編）1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版）p. 65に掲載された星野（星野命 1970 感情の心理と教育（一、二）児童心理 24, 7および8, 1264-1286, 1445-1477）の訳を使用した。

注2：本文中に記載した内的整合性係数（ α ）は、本論文で使用している調査データを用いて算出したものである。付録2で示している内的整合性係数は、三田（2000）が調査したときのデータである。異なるデータを使用しているため、内的整合性係数の数値が異なっている。

付録3 SEI-Bの因子分析結果 (三田、2008)

	I	II	III	IV	V	共通性
22. 友達や知り合いの中に、あなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えると、そのことが心配でならない。	.755	.235	.007	.002	.005	.633

23. 他人があなたのことをどのように考えているか気になる。	.694	.009	.137	.101	.181	.551
19. 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、気になる。	.669	-.001	-.097	.224	.112	.520
21. 自分の意見に同意しない人々を説得している場合、自分が相手にどのような印象を与えているか、気になる。	.571	.155	-.002	-.168	-.489	.618
12. 人前を気にしたり、はにかみをおぼえる。	.000	.735	.106	.134	.116	.584
13. クラスや自分と同年輩の人々のグループの前で話すとき、心配したり、不安になる。	.158	.617	.006	-.102	.009	.428
11. 他の人々がすでに集って話し合っている部屋に、自分一人で入っていくような場合に、気兼ねや不安をおぼえる。	.152	.600	-.008	.008	.317	.496
14. 他の人々が見ている所で、ゲームやスポーツをやっており、それにぜひ勝とうと思っている場合に、とり乱したり、まごついたり（あがったり）する。	.004	.582	.125	.247	-.242	.476
6. 自己嫌悪をおぼえる（自分で自分がいやになる）。	.101	.008	.710	.199	.004	.562
5. あなたが、自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと、疑いをおぼえる。	.129	-.003	.674	.003	-.273	.549
8. 自分には、うまくやれることなど全然ないといった気持になる。	.006	.010	.621	-.005	.004	.403
2. 自分が価値ある人間であるか。	.005	.007	.543	.364	.108	.446
10. あなたの仕事ぶりや、成績を審査する立場にある人の批評が気になる。	.222	.221	.005	.633	-.001	.502
9. 自分が他の人々と、どのくらいやっつけられるかを気にする。	.230	.372	.153	.572	.113	.555
3. 自分の知ってる人々が、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくる。	.001	-.008	.109	.556	.010	.338
18. 初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話しをするのがむずかしい。	.147	.293	.118	.002	.766	.709
16. 人と一緒にいるとき、どんなことを話題にしたらいかが困る。	.285	.218	.228	.290	.535	.551
1. あなたの知っている大部分の人々に比べて、自分の方が劣っている。	.401	.010	.362	.005	.265	.374
4. 自分の過誤（ミス）は自分のせいだと	-.006	.004	.489	.003	.184	.278

感じる。						
7. あなたが、自分のいろいろの能力について、自信をもてるか。	-.310	.225	.166	.177	-.273	.278
15. 他の人々から、優等生とみられているか、あるいは劣等生とみられているか、気になる。	.498	.147	-.001	.367	-.150	.427
17. 「とんでもないミスや、ばかにされるような大失敗をしでかしたときのことが、気になる。	.378	.424	.004	.108	.264	.406
20. 恥かしくてどうにもならないと思う。	.121	.395	.383	-.377	-.003	.461
二乗和	4.86	1.88	1.66	1.43	1.32	
寄与率 (%)	21.2	8.2	7.2	6.2	5.7	
α	.704	.632	.639	.525	.63	

注) SEI-Bについては、Janis, I. L., と Field, P. B. (1959) が作成した尺度を遠藤ら (1981) が翻訳したSEI (アイデンティティの心理学 (遠藤辰雄 (編) 1981 第6章「自尊感情の測定」ナカニシヤ出版) p. 73に掲載された表6-7「項目分析 (上位・下位分析) の結果」) を参考に翻訳を行い、回答方法を変え作成した (三田、1984)。

(2016年12月7日受理)